様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月１５日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2008
課題番号：19720057
研究課題名（和文）王政復古期文学の変容と＜他者＞表象の関連についての研究

研究課題名（英文）A study on the relationship between the change of Restoration literature and the representations of “other”

研究代表者
福士　航（FUKUSHI WATARU）
北見工業大学・工学部・准教授
研究者番号：10431397

研究成果の概要：本研究では、英国王政復古期の作家アフラ・ベインの演劇・散文作品に見られる＜他者＞表象を、ジェンダー・党派政治イデオロギーの側面のみならず、人種・階級・振る舞いのコードなどの側面からも分析し、その結果、演劇的表象が＜他者＞のステレオタイプへの固定化に向かうことを明らかにする一方で、散文における＜他者＞表象は複層化することを確認した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	180,000	1,380,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：英米文学

１．研究開始当初の背景

本研究代表者は、イギリス王政復古期の演劇におけるセクシュアリティ表象と政治言説の相互的な関連性について焦点を絞り研究を行い、なかでもアフラ・ベイン（Aphra Behn, 1640-1689）の演劇作品をおもな研究対象としてきた。ベインの文学作品は、彼女が英国初の女性の職業的劇作家であったという事実からフェミニズム批評の多大な関心を集めてきたが、実際に彼女のテクストに触れてみると、テクストにはフェミニズムの観点からだけでは論じきれない点が多々ある。フェミニズム批評へのひとつの修正として、例えばベインの作品中に見られる党派政治イデオロギーについて、Susan Owen, Restoration Theatre and Crisis が王位継承排除危機における党派政治と演劇の関係を精査している。しかし、オーウェンの議論も劇中の対立軸を性と党派政治の面から考察した限定的なものであり、ベインのテクストの総体的な全体像を捉えているとは言い難い。このような中で、ベインの作品群に広く見られる＜他者＞の

表象の多様性を、多角的な見地から再検討する必要性を痛感するようになっていた。そこで本研究は、フェミニズム批評による研究の蓄積を踏まえつつ、そこに建設的な修正を加えることを意図した。

２．研究の目的

本研究では、ベイン文学における＜他者＞の表象を、ジェンダー的な側面や、イングランド国内における党派政治イデオロギー的な側面のみから分析するのではなく、人種間・階級間の対立を含んだ植民地言説的側面や、振る舞い(behavior)の規範という文化的な側面などからも総合的に再検討し、それによっていかに演劇では＜他者＞表象が限定されてしまうかが前景化され、散文において＜他者＞を重層的に表象する方法が模索されるようになるか、といった文学のジャンル的変遷の一端を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

（１）２００７年度には、基礎研究に重点を置き、王政復古期の文学テクスト・歴史資料・参考文献などの収集と精読により、研究全体の設計を明確にすることを目指した。

資料や文献を収集・分析した結果見えてきたことは、一つには、王政復古期の演劇において衣装や書き割りなど視覚的装置が発達し、結果として＜他者＞をステレオタイプ化する表象のスタイルが発展したことである。人種的＜他者＞を舞台にのせる際に、前近代的な呪術崇拝を表わすような祭壇を設置したり、異国情緒を喚起する歌や踊りを定式化したりすることで、人種的＜他者＞を定式化するような上演のスタイルが、王政復古期の舞台では確立されていった。この点に関連して、アフラ・ベインの戯曲『未亡人ランター』についての研究を進め、論文にまとめた。

（２）２００８年度には、学会で成果を発表することにより、他の研究者からの評価（助言・批判を含む）を受けて、研究の客観性を高めると同時に、若干の軌道修正を行った。また、研究成果を論文等にまとめるための活動も進めた。トマス・サザンら王政復古期の中心的劇作家達のテクストにみられる＜他者＞表象の特徴を精査し、ベインのテクストとの差異を検証する基礎を構築した。さらに、ベイン作品群に特徴的な多層的に表象される＜他者＞を、各々のテクストが持つ歴史的・文化的コンテクストに即して読み解き、いかなる力が作用してそのような表象を推進しているかを検証した。その際に重要になるのは、従来の先行研究で盛んに議論されてきた、性と政党政治のポリティクスが絡み合う側面だけを意識するのではなく、同じく「男性・王党派」と分類できる人物たちの中にも、「振る舞いの規範」など別の基準によって＜他者＞として描かれる人物が表れることを漏らさず記述することである。２００８年度の成果をまとめた論文は、現在執筆中である。

４．研究成果

（１）２００７年度に行った研究の成果発表として、下に挙げた共著『ポストコロニアル批評の諸相』のなかに、「想像の王権――『未亡人ランター』における＜他者＞表象とパフォーマンス」（同書１１－４４頁）と題する研究論文を投稿した。本書は、査読ありの研究論文集であることを申し添える。

当該論文において、本研究代表者は、１６８９年、作者アフラ・ベインの死後に上演された『未亡人ランター』をとりあげて、人種的・ジェンダー的＜他者＞を切り分ける力学と、「振る舞いのコード」によって＜他者＞を分類する力学とが相互に関連し合っていることを指摘した。また、＜他者＞を析出する言説の権力を注視するだけでなく、ジュディス・バトラーのパフォーマティヴ論に依拠しながら、＜他者＞と表象される登場人物たちのパフォーマンスに着目し、それによって＜他者＞を確定しようとする線引きの力学に揺らぎが生じるか、あるいは逆に＜他者＞析出の力学が固定されてしまうかを精査した。

『未亡人ランター』の舞台は１６７０年代のヴァージニア植民地であり、「インディアンの王」カヴァーニオ、「インディアンの女王」セマーニアを中心とした現地人が数多く登場する。本論文では、まず、現地人たちの表象とパフォーマンスを分析した。現地人たちは、はじめ当時の歴史状況を踏まえた表象がなされる。すなわち、英国人入植者たちと交易し、その結果銃器を手に入れて、銃という西洋の武器を頼みにし、入植者たちと敵対する者たちもいる、という状況である。しかしながら、劇が進み入植者たちと現地人たちが交戦する場面では、銃器を手にした現地人は一切登場せず、かわりに弓矢や戦斧といった「後進的」現地人を象徴する武器を手に戦闘を繰り広げる。また、戦闘の成り行きを呪術によって占う場面もあり、現地人たちのパフォーマンスは、「呪術崇拝の後進的な現地人」というステレオタイプを固定化するように機能している。

次いで、現地人の女王であるセマーニアと、英国人入植者であるタイトル・ロールの未亡人ランターの表象とパフォーマンスを比較

分析した。セマーニアとランターは一対の存在として表象されており、共に男装して戦場に足を踏み入れるというパフォーマンスにも共通した点がある。しかしながら、セマーニアは、現地人女性が英雄の征服欲の対象として表象されるという王政復古以来英雄劇で繰り返し描かれてきた「制服のロマンス」の枠組みから自由ではなく、植民地政府に反旗を翻した英雄的存在の白人入植者ベーコンの欲望の対象となるばかりで、受動的なアイデンティティを付与されているにすぎない。一方のランターは、王政復古演劇において一定の自由を付与されている寡婦というキャラクターの特性を体現し、財産の保持・商売への参入などを果たした女性である。最終的にランターは、植民地議会の一員に名を連ねる男と自らの意思で再婚を成し遂げ、社会的な階級上昇を果たす。セマーニアとランターという一対の存在である二人の女性の関係は、有色人種女性の未来を奪った上に白人英国人女性の能動性を描くという、人種的差異を軸とした＜他者＞表象の力学にそったものであるのだ。

振る舞いのマナーという観点からこの劇を見ると、秩序の中心となるような規範的マナーがこの劇には欠如していることが明らかになる。現地人の王カヴァーニオと英雄的入植者ベーコンは「宮廷的慇懃さ（courtesy)」を基調とした振る舞いを是認するが、別の登場人物たちによって、その価値観が時代錯誤的なものでもあることが同時に指摘されもする。一方で腐敗した植民地政府の役人たちが重視するのが「市民的礼儀（civility)」であるが、それが植民地政府の役人には全く備わっていないことが笑劇的筋立ての中で風刺的に明らかにされる。『未亡人ランター』の劇世界では、秩序の中心となる規範が欠落しているのである。

＜他者＞の表象とパフォーマンスを通じてこの劇を見てくると、中心的＜自己＞が不在であることが明らかになる。この不在は、１６８９年という上演時の歴史的文脈、すなわちベインが敬愛したスチュアート家のチャールズ二世、ジェームズ二世の兄弟による治世が過去のものとなり、ベインにとっての正統的王権が不在となった時に、正当な権威を希求する『未亡人ランター』は上演されたのだった。人種的＜他者＞を囲い込み、政治的＜他者＞が跋扈する世界を描いた芝居において、理想的＜自己＞の像は、想像的に喚起されるしかなかったのである。

（２）２００８年度に行った研究の成果を、下記の学会において口頭で発表した。

当該発表において、本研究代表者は、アフラ・ベインの散文作品『オルノーコ』の、トマス・サザンによる演劇への翻案作品をとりあげ、感情を可視化する演技術がこの劇では採用され、観客にも理解可能な感情を舞台で表現するために、黒人女性の表象が舞台から追いやられていることを論じた。

本発表において、まず、感情の可視化という演技術は、チャールズ・ギルドンによる『ベタートン伝』（１７１０年）において、王政復古を代表する名優ベタートンから後進の役者への助言という形で、役者に不可欠な技能として提示されていることを指摘した。

次いで、サザンの『オルノーコ』のなかから、「憐憫」を表現することが期待されている場面（２幕２場）や、「愛」と「名誉」とでオルノーコが板挟みになる場面（５幕５場）の分析を行い、いかに内面の感情を外部に示すことが役者に求められているかを指摘した。

内面の感情を外部に開くことが役者に求められていたのは、その上演を観客が見ることによって、観客の中にも同様の感情を喚起させ、最終的には観客がその感情を発散させることが演劇の目的の一つであったことを論じた。『オルノーコ』を観劇した観客（特に女性）が、芝居を見ながらこれ見よがしに涙を流す姿を風刺したパンフレットが１８世紀には多数出版されており、観客も自らが「見られる」対象であることに自覚的だったのが１８世紀演劇の特徴で、こうした劇場での慣習は、王政復古以来指摘されているものである。『オルノーコ』は、憐憫や同情という感情を舞台上で提示することで、観客の中にも同情心を喚起し、その結果、観客の多くにその感情を涙という形で発散させることを目指す芝居なのである。

観客が理解可能な感情を舞台上で表現するためには、ベインの原作では黒人だったヒロインのイモインダを、白人に変更する必要があったことを最後に論じた。当時の舞台では、黒人を表現するために＜黒塗り＞の化粧をすることが男性俳優では慣習となっていたが、女優は＜黒塗り＞をしないことが慣習だった。なぜこのような慣習が続いたのかには諸説あるが、少なくともサザンの『オルノーコ』においては、白人中心の観客に共感可能な感情を舞台上で表現するために、イモインダは白人でなくてはならなかったのである。つまり、芝居の製作者側が観客の中に憐れみを喚起することを狙い、観客の側も喜んで同情の涙を流すことができる芝居においてイモインダは白人に変えられたのであり、黒人同士の悲恋が同情の対象にならないことが合意事項だった劇場が浮かび上がってくる。こうした劇場こそが、植民地主義を生成するイデオロギー装置としての１８世紀劇場だったのであり、１７世紀末に生み出されたサザンの『オルノーコ』は、その中で重要なコンテンツとしてレパートリーの位置

を付与され続けたのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

福士航、発表題：「見える感情、見えない女――Thomas Southerne, Oroonoko のドラマツルギー」、発表学会：十七世紀英文学会東北支部 2008 年度第 4 回例会、2009 年 3 月 27 日、於：東北学院大学土樋キャンパス

〔図書〕（計１件）

岩田美喜・竹内拓史　編、東北大学出版会、『ポストコロニアル批評の諸相』、2008 年、１１－４４頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
福士　航（FUKUSHI WATARU）
北見工業大学・工学部・准教授

研究者番号：10431397

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：